

教養学部

I	教育水準	教育 18-2
II	質の向上度	教育 18-4

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

期待される水準を上回る

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、全学の1・2年次生すべて（6,660名）を対象とした教養教育の責任部局としての性格上、国際的・学際的教育を実現するために専門性、性別、国籍、実社会での活動歴等の点で多様な教員を雇用している。また、非常勤講師の活用のための「教務委員会枠」の設定や授業に支障を生じさせないための「人事小委員会」の設置等が図られているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、学外有識者を含む運営諮問会議を年4回開催し、更なる改善に前向きに取り組んでいる。また、前期課程（1・2年次生）のすべての授業に対して「学生による授業評価」を毎学期実施し、90%という高い実施率を上げているほか、その結果のフィードバックを徹底しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、教養学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、教養学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

2. 教育内容

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、学際性と国際性を重視した内容の科目がバランスよく履修できるように配置されている。平成18年度には「生命科学」の必修化等のカリキュラムの改革が実施され、より一層充実したものとなっているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、前期課程の学生の要請に応じて、平成19年度より全学の専門家による「学術俯瞰講義」が開講されるとともに、学生の希望に沿った自由ゼミナールの開設等の取組を行なっている。一方、大学教育の国際化推進プログラムの一環として東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブも採用され、前期課程教育にアジア色が新たに加えられた。後期課程においては日本社会の国際化の要請でもある

AIKOM (Abroad In KOMaba) プログラムを実施しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、教養学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、教養学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

3. 教育方法

期待される水準を上回る

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、平成 17 年度に前期課程教育開発に向けて教養教育開発機構が発足した後、新しい取組がなされている。具体的には、平成 19 年度に現代的教育ニーズ取組支援プログラム「最新の ICT を用いた新しい教育モデルの実践」に採択され、「駒場アクティブラーニングスタジオ」が開設され教育環境の刷新がなされた。また、英語カリキュラム改革にも力を入れて取り組んでいる。前期課程教育と大学院教育・研究との連携のために平成 18 年度に「附属生命科学構造化センター」を開設し、これをベースとして画期的な教科書「生命科学」や「理系総合のための生命科学」を編纂するなど生命科学履修のための教材が開発されているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、前期課程における単位の実質化を目指して、平成 18 年度に進学振り分けの基準を改定し、総合科目の期末試験受験率が前年度比およそ 1.5 倍に向上した。また、学生アドバイスシステム制度の運用も評価できる。後期課程では、毎年 2 年次生向けに学科・分科ごとにガイダンス、研究室公開を実施している。進学後はモデルカリキュラムによる履修指導、寺子屋補修、卒業論文・卒業研究指導體制の充実を図っている。施設設備面では、PFI (Private Finance Initiative) 事業による駒場コミュニケーションプラザの開設による、キャンパス東部の教育環境が一新されたなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、教養学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、教養学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

4. 学業の成果

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、前期課程において、91%～92%の学生が順調に単位を修得し進学している。退学者は平均して約1%に抑えられている。後期課程を2年で卒業する学生は65%～70%となっている。後期課程修了に時間を要するが、海外修学によって習得できる資質や能力には代え難いものがある。また、卒業論文・卒業研究が学会誌に掲載された件数は多く、学生が高い学力を習得したことが分かるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、毎学期実施している授業評価のためのアンケートの結果から、授業内容等に対して肯定的な評価が80%以上の高いレベルを示した。授業に対する満足度は平成18年のカリキュラム改革直後に一旦下降したが、その後上昇し平成19年冬には法人化時点を上回るレベルに達した。平成19年度に実施された修了生向けに実施した「教養教育の達成度に対する調査」では、学問的知識について肯定的評価が70%を超えるなどおおむね高い評価が得られているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、教養学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、教養学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

5. 進路・就職の状況

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、卒業生の4～6割が大学院へ進学していることが特徴となっている。就職者の就職先は多岐にわたっているが、官公庁、サービス業、マスコミ等の割合が高い。卒業後の進路は着実に確保できているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、平成19年度に実施した「教養学部・総合文化研究科卒業生雇用主インタビュー」の結果から、当該学部卒業生への評価は非常に高く、当該学部が重視している「国際的能力」や「学際的関心の広さ」への肯定的な評価が認められるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、教養学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、教養学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は2件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。